

求菩提の鬼の石だん

むかしむかし、豊前市の求菩提山につたわるお話じゃ。権現様のおらるる求菩提山のおだやかな山里にな、どこからか鬼たちがやってきよって、村人のたいせつな米や豆などぬすんだそうな。子どもや女の人もいなくなるときがあるんじゃ。きつと鬼がつれさつたんじゃと、村人はびくびくしながらくらしとつた。

こまつた村人たちはな、権現様におねがいに行つたそうじゃ。

「権現様、おねげえがありますんじゃ。鬼どもがわしらの村におりてきて、米や豆や大切な食べもんを取つち行つちしもうち。」

「わしかたん牛ん子もじゃ。」

「おけたん子がおらんごつなつち、おおごつしちよります。」

なきじやくりながら、村人は口々に権現様におねがいたそうな。

権現様は、村人のこまつた様子をごらんになり、一計を案じた。そして、さっそく鬼たちを山の中に呼び集められ、

「鬼たちよ。わしの住む社を、この求菩提の山ちようにつくりたい。じゃが、この山は大へんけわしくこまつ



ておる。鬼たちよ。たのみがある。千だんの石だんをきずいてもらいたい。それも、朝一番どりが鳴くまでにじゃ。どうじゃな。」

鬼たちは、顔を見合せ首を横にふり、聞こうとはしなかったのな、権現様は強いことばで、もう一度申しつけられたそうな。

「千だんの石だんをきずくことができたら、お前たちは今まで通り、この村里でどのようなことをしてもかまわぬ。ただし、一番どりが鳴くまでに千だんのうち一だんでもできあがらなかったら、この山から去って行ってもらおう。よろしいな。」

権現様は「鬼たちは、ひとばんでつくれない。」と思われた。じゃが山を追い出されてはたまらない鬼たちは、

「権現様のおいつけ。朝までに。石だんきずけや、山上。」

と声をかけながら、一生けんめいはたらいたそうな。重い石を運ぶ鬼。けわしい山の岩をけずる鬼。力を合わせ鬼たちは、どんどん石をつみ重ねたそうな。

さて、夜明けにはまだ時間があるころ、そつと木のかげからのぞかれた権現様はびっくりされた。何と千だんにはもうすぐそこ。あわてた権現様は手にもったタコロンバチ

(竹のかわの笠)をたたき、



「コケコッコー！」

と一番どりの鳴きまねをしたそう。するとそれにつられ、里のわたりもいっせいに鳴きはじめた。「しもうた。朝がきた。」

とあわてた鬼たちは、いちもくさんに、山からにげ去ってしまったそう。

鬼がおらんことなつて村人は権現様にお礼を言い、平和にくらしたとさ。

今でも求菩提山に登ると、中宮から上宮にかけて八百五十だんの石だんがつづいている。

(米村祥子)



求菩提の鬼の石だん